

悪役令嬢の矜持①

～婚約破棄、構いません～

リコピン
Rikopin

Characters

登場人物紹介

オズワルド

↓
学園の教師。

ギレス

↓
王太子の護衛騎士。

ユリウス

↓
クリスティーナの兄。

ソフィア

↓
乙女ゲームのヒロイン。
中身は転生者で、その
知識を活かし王太子と
ハッピーエンドを迎えた。

アレクシス

↓
この国の王太子。努力家
に見えるソフィアを愛する
ようになり、クリスティーナ
との婚約を破棄する。

フリード

↓
規格外の強さを持つ辺
境伯。孤独に戦うクリ
スティーナを熱愛している。

クリスティーナ

↓
誇り高き公爵令嬢。王太
子と婚約していたが、その
婚約を破棄されてしまう。

目次

悪役令嬢の矜持^{きやうじ} 1

ゝ婚約破棄、構いませんゝ

書き下ろし番外編

翼をたたむ夜

悪役令嬢の矜持 1

〜婚約破棄、構いません〜

プロローグ

「……婚約破棄、ですか？」

「そうだ。クリスティーナ・ウィンクラー、私と君の婚約を本日この時をもって破棄する」

王立学園内の王族専用の執務室で向かい合わせに座る王太子——アレクシス・シュタイアート殿下の言葉が信じられず、私は啞然とする。

（解消ではなく、破棄……）

到底受け入れられない内容だ。破棄という二文字だけが、グルグルと頭の中を回り続けている。

目の前に座る王太子がその豊かな金糸をかき上げた。こちらを見据える碧の瞳は冷たい怒りを湛えている。

彼の隣にはストロベリーブロンドの少女が座し、二人の背後には殿下の側近候補の学

友と護衛騎士が立つ。慣れ親しんだとまでは言えないが、幼い頃よりそれなりの交流を持ってきたはずの二人の男たちの瞳にも、王太子殿下と変わらぬ怒りが滲んでいた。

「クリスティーナ、悪あがきはよせ。殿下へ了承の返事をしろ。ウィンクラーの名を汚すな」

「……お兄様」

自身の右隣に座る兄、味方であるはずの身内にまで切り捨てられて、視界が暗くなる。傾きそうになる身体を必死に引き起こした。

ここで気を失うなど、そんな無様を晒すのは許されない。暗転していく視界を目をきつく閉じることでやり過ごし、顔を上げた。

先ほどと変わらぬはずの光景に、不意に違和感を覚える。脈絡もなく、一つの疑問が浮かんだ。

——どうして、卒業式での断罪じゃないの？

（卒業式？ 私、何故卒業式なんて考えたのかしら？）

自分で呈した疑問がどこから生まれたのかが分からずに混乱する。

卒業式とはおそらく、一週間後に学園を卒業する殿下方三年生を見送る卒業式典のこと。そのような場での断罪などあり得ないと分かっているのに、何故かその場の光景が

ありありと脳裏に浮かんだ。

「クリステイーナ、君が返答を渋ろうと、今回の婚約破棄については王家と公爵家で既に話がついている。決定が覆ることはない」

殿下の宣告に返すべき言葉を探す。自身の混乱を収めるために、時間稼ぎをしなければならぬ。

「理由をお伺いしてもよろしいでしょうか？ 何故、婚約が破棄されるに至ったのでしょうか？」

「ふん。身に覚えがないと？」

殿下の問いに、私は口をつぐんだ。彼の言わんとすることは分かるが、認めるつもりはない。

殿下が背後を振り返り、イエルク・ミューレンの名を呼ぶ。呼ばれたイエルクが一歩前に出る。

「クリステイーナ・ウインクラ嬢。ここに、貴女がソフィア・アーメント嬢に對して行つた暴行、傷害に関する証拠書類があります」

「身に覚えがありません」

「ええ、そうでしょうね。貴女自身は何の手出しもししていない。ですが、ソフィア嬢に

對する一連の加害行為を貴女は知っていたはずだ。実行者は貴女の支持者、信奉者たちなんですから」

少し長めの茶色の前髪に向こう、銀縁の眼鏡の奥から真つすぐにこちらを射る榛色の瞳には、怒りと侮蔑が込められている。

イエルクの言う通り、確かに私は派閥の者たちの行いを知っていた。知っていて彼らを止めなかった。それを罪だと責められようと、私の判断は間違っていない。

けれども同時に、「悪手だった」と自身の失態を認める思いも浮かんできた。

（悪手？ 何故？ 平民上がりの男爵家の者が殿下のお傍近くに侍ることが間違いないのよ）

そう、思うのに――

（いいえ、違う。この女、……この方は、前王家の末裔、その身に貴き血が流れる……）
突如浮かんだ考えに眩暈がした。

花の王家といわれたハブリスタント家。未だ国民からの絶大な支持を得ている前王家は、既に百年前の政変で滅びている。目の前の彼女がその末裔だなんてあり得ない。

荒唐無稽な妄言が何故急に浮かんだのか。その原因を探るために、目の前の少女――ソフィア・アーメントをもう一度眺めた。

「……あの、クリスティーナさん？」

ストロベリーブロンドの髪に青空を写し取ったかのような澄んだ眼差しを持つ少女は、こちらの視線に怯えたのか、小さく身動く。彼女の肩を殿下がそっと抱き締めた。

少女の口元に甘い笑みが浮かんだ。応えるように、殿下の碧い瞳が優しく弛む。二人の姿にはつきりとした既視感を覚えて、衝撃が走った。

（ああ、なんてことっ！ 私、私はこの光景を知っている!?）

思わず立ち上がりかけたが、瞬時に剣先を目の前に突き付けられた。漏れそうになった悲鳴は、兄の叱責にかき消される。

「クリスティーナ！ 何を考えている。殿下の御前だぞ。弁えろ！」

兄にドレスを引かれたせいで、中途半端に浮いた身体が引き倒された。目の前には未だ抜き身の剣が突き付けられている。剣の向こう側には、短い黒髪の男ギレス・クリーガーが、殿下とソフィアを背中に庇うようにして立っていた。

動けば切ると言わんばかりの漆黒の瞳にヒタと見据えられ、再び既視感を覚える。視界の隅に、兄が頭を下げるのが映った。

「殿下、申し訳ありません。殿下のご温情を理解しようとしてもしない妹の非礼、父に代わり、ウインクラーとして謝罪いたします」

「いい、許す。ユリウスには今回の件で随分と骨を折ってもらったからな」

殿下の言葉に兄がもう一度頭を下げたところで、漸くギレスが剣を下げる。

私は隣に視線を向け、顔を上げた兄の姿を呆然と眺めた。プラチナブロンドの髪に凍てついた水のような碧い瞳。自分と同じ色を持つ兄の姿は、見知っていて当然のもの。

けれど、もっと別の場所でのこの瞳を見たことが――

「クリスティーナ、帰るぞ」

「……帰る？ ですが、まだ話は終わっておりません」

「いや、終わりだ。今回、殿下との面会が叶ったのは殿下の温情によるもの。本来なら、家への通告をもって婚約の破棄は完了するはずだったのだ」

兄の言葉に歯噛みする。

既に破棄は成立している、反論も許されないというのなら、何故私がこの場に呼ばれたのか。こんなものが本当に温情だと言えるのか。

「さっさと立て。帰るぞ」

混乱する頭では思考が追いつかず、言われるままに立ち上がる。

退出を告げる兄に倣って頭を下げ、部屋を出ようとした刹那、視界に飛び込んできた光景に息を呑んだ。

寄り添い合うアレクシス殿下とソフィアの二人、彼らの左右にイエルクとギレスが並び立つ。

（ああ、そうか、そういうことなのね……）

突如として蘇った記憶、流れ込む膨大な情報を理解する。

やはり、これは、この場合は、殿下の温情などではない。

これは、断罪だ――

私はこの場面を知っている。本来ならこれは、一週間後に行われる殿下の卒業式典において発生するイベント。秘されし王家の末裔を害した元凶を、王太子殿下の婚約者という立場から引きずり下ろし、学園、そして王都から追放する断罪劇の一場面。

物語の主役は目の前のソフィアで、彼女に仇なす悪役は公爵令嬢クリスティーナ・ウインクラー、この私だ。



銀に近い透き通るような金髪が、扉の向こうに消えていった。

（……やっと、終わった）

知らぬ間に詰めていた息を吐き出す。隣に座るアレクシスの手が伸びてきて、髪を撫でた。

「本当に、これで良かったのか？」

「うん、十分だよ」

「私としては、ソフィアへの危害を理由に、あの女を学園から追い出したかったんだがな」

「ありがとう。でも、そこまでするには証拠が足りなかったから」

彼の言葉に苦笑すると、イエルクが頭を下げる。

「申し訳ありません。私の力が及ばず」

「そんな、違うよ！ イエルクは一生懸命やってくれたじゃない！ 証拠も証言もちゃんと取ってくれて、おかげで嫌がらせしてくる人たちは殆どいなくなったんだから！」

「ですが、完璧ではありません。貴女を誹謗中傷する奴らを完全に排除するには至っていない」

吐き捨てるような声に、アレクシスが苦い顔になった。

「クリスティーナと実行者との直接的な繋がりを押さえられなかったのが痛いな」

「はい。彼女を庇っているのか、何なのか。皆が皆、己の意思で動いた、クリスティー

ナ嬢の指示はなかったと証言していますから」

「派閥の者の統制を取れなかったとして、『クリステイーナに王太子妃たる資格なし』と陛下に婚約の破棄を認められたが、学園を追い出すにはやはり弱いか」

アレクシスとイエルクが悔しげに話すのを横で聞きながら、私は自分の人生における最大の山場を無事に越えられたことにホッとする。

（悪役令嬢に『ざまあ』されずに済んで、本当に良かった）

私には、物心つく前から前世の記憶というものがある。その記憶のおかげで、子どもの頃から「優秀だ」と評価され、実の親も分らない孤児にもかかわらず、男爵家に養子として迎え入れられた。実の子同然に愛されて、というわけにはいかなかったけれど、衣食住に困ることもなく、貴族として最低限の教育を受けることもできた。

そうして、この世界を知っていく中で気付いたのは、自分が生きているのが前世の記憶にある乙女ゲーム『蒼穹の輪舞』の世界ではないかということだ。国名や攻略対象だったアレクシスたちの名前、王立の学園が存在するという事実から、確信に近いものを感じていた。

それと同時に、自分自身の容姿にも、「もしかして」という予感があった。ストロベリーブロンドの髪に碧い瞳。それは、『蒼穹の輪舞』のヒロインが持つ色とまったく同

じだ。

（最初は、単純に嬉しかったんだよね）

隣でイエルクを相手に真剣に話をしているアレクシスの横顔を盗み見る。

（綺麗な顔……）

何度見ても感動してしまう。

前世でゲームのパッケージに描かれていた彼を初めて見た時から、私はずっとアレクシスが好きだった。

その大好きだった彼が目の前に現れ、手の届く距離にいる。信じられないくらい奇跡に何度も感謝し、アレクシスにクリステイーナという婚約者がいることを承知で、彼へアプローチし続けた。

結果、彼と想いが通じ合えたのは、前世の知識による部分が大きいが、そこに後悔はない。

（だって、アレクシスの隣だけは、絶対、誰にも譲れないもの）

最初こそ、思い悩むこともあった。この世界がゲームに酷似しているとはいえ、実際は別物、よく似ただけの世界という可能性もある。そんな世界で、男爵令嬢にすぎない自分が王太子であるアレクシスに近づくなんて許されるはずがない。

（実際、嫌がらせは酷^{ひど}かったし）

ものを隠されたり壊されたり被害はまだしも、直接的な暴力行為には何度も心が折れそうになった。普段の生活ではアレクシスたちが傍にいてくれたので問題はなかったが、一つ年上の彼らとずっと行動を共にはできず、魔術科の演習では悪意ある攻撃に晒され続けた。クラスで唯一の友人、ゲームの攻略対象でもあるパウルが助けてくれなければ、きっと耐えきれなかっただろう。

（ただ、そのせいで、パウルの好感度が上がりすぎちゃったのは失敗だったかな）

アレクシス以外の攻略対象者たちを「攻略」するつもりなんてないから、余計な好感度を稼いだことに不安はある。複数の攻略対象者に好かれる、所謂^{いわゆる}「逆ハーエンド」に到達していたら――

「……ソフィア、聞いているか？」

「え!? あ、ごめんなさい! ボーッとしてて」

アレクシスの問いかけに慌てて返事をする。

「いい、気にするな。余程、気を張っていたんだろう。やはりお前を残して卒業するのは心配だな」

「そんな、心配なんてしなくても……」

「いや、クリスティーナを追い出せなかったんだ。あの女がこのまま大人しく引き下がるかどうか」

不安を口にする彼に、首を横に振って答えた。

「確かに、ちよつと不安だけど、でも、パウル君やボルツ先生がいるから」

「そうだな。だが、できれば、ソフィアのこととは私自身の手で守りたい」

味方になってくれる友人とクラス担任の名前を挙げると、アレクシスが困ったように笑う。

「婚約破棄を直接告げれば、クリスティーナが逆上して何かしかすかと予想したんだが、思った以上に冷静で付け込む隙^{すき}がなかった」

「でも、アレクシスがちゃんと婚約破棄してくれたから、それだけで私は嬉しかったよ」

そう告げた途端、アレクシスは柔らかな笑みを浮かべる。

前世の知識には、乙女ゲームを題材とした悪役令嬢の逆襲、「ざまあ」というものが存在する。そうならないために、攻略対象者たち全員を攻略する「逆ハーエンド」や卒業式での婚約破棄といった常識外な真似はしないように注意してきた。

クリスティーナの断罪の場も、自分からお願ひしてアレクシスの執務室に変えても

らったくらいだ。

この閉鎖空間で、絶対に自分の味方だと確信を持てる人たちの中であれば、クリスティーナに逆襲されることはない。

「ああ、そうだ。ソフィア、お前との婚約発表についてなんだが」

今回の結果に満足している私の横で、アレクシスがすまなそうに口を開いた。

「クリスティーナとの婚約破棄についてはすぐにも周知するつもりでいるが、婚約発表については少し先になる。ただ、お前が花の王家の末裔であることは陛下にお伝えしてあるから、時間はかかろうと、必ず認めてみせる」

彼の言葉に、私は自身の胸元に触れる。ゲームにも出てきた前王家の血筋を表す花の模様は、アレクシスと想いが通じ合った時に、胸元に浮かび上がった。

愛する者に幸福をもたらすといわれるハプリスタントの花。この印さえあれば、私がアレクシスと結ばれることに何の問題もない。

「うん、分かってる。大丈夫、いくらでも待つから」

「早ければ、卒業式典後の祝宴で発表できるだろう。待ち遠しいな」

アレクシスの手が胸元に置いた手に重なる。

私は込み上げる涙を押し殺して頷いた。

前世の知識のおかげではある。だけどそれに頼り切ることなく、私は自分の努力でここまでできた。大好きだったアレクシスだけを一途に想い続けて、そして、とうとう手に入れたのだ。

前世で夢見た私だけの王子様と迎えるハッピーエンドを――

第一章 婚約破棄という名の始まり

ガタゴトと音を立てて走る馬車の中、向かい合わせに座る実の兄の姿をぼんやりと眺めていた。

眉間に皺を寄せ険しい表情で目を閉じる男の姿は、見慣れた兄のもの。

けれど、遙か彼方の記憶によると、彼は『蒼穹の輪舞』という乙女ゲームの攻略対象。悪役令嬢の兄であり、将来のウィンクラー公爵ユリウス・ウィンクラーでもある。

ゲームのユリウスは、主人公であるソフィアに時に冷酷なほど厳しい言葉を投げかけながらも、いつしか彼女の優しさに絆され、彼女を守りたいと思うようになる。ソフィアへの気持ちを認めた後は、甘い言葉と眼差しで彼女を慈しむが、ソフィア以外には非情のまま。たとえ実の妹であろうと、愛するソフィアを傷つける者には一切の容赦をしない。

(っ！……大丈夫、大丈夫よ)

思い出してぞっとしたゲームでの彼の姿を、頭から追い払う。

仮にここがゲームの世界なのだとしても、ソフィアが選んだのはアレクシス殿下だ。

兄であるユリウスとの仲は噂にもなっていないのだから、彼が私を追い詰めることはない。

(でも、だとしたら、何故あの場にユリウスがいたの？)

『蒼穹の輪舞』には逆ハーエンドも存在するが、その場合は、ヒロインが特定の誰かと結ばれる描写はない。私と殿下の婚約が破棄されたことを考えれば、間違いなく「アレクシスルート」だと思うのだが――

「……降りろ」

兄の一言に、物思いから覚めた。気付けば、馬車の振動が止まっている。

兄に急かされて降り立った場所は、ウィンクラー公爵家の王都邸だった。

王立学園では寮生活が基本のため、帰宅は一週間ぶり。一週間前にこの邸を出た時には想像もしていなかった自身の状況に、前へ進むことを躊躇した。それを見た兄に腕を引かれる。

「父上がお待ちだ。今回の不祥事について、お前自身から話を聞きたいそうだ。……精々、あがいてみるがいい」

そう吐き捨てられた言葉の根底にある怒りは、ウィンクラーの名を汚されたことに対

する公爵家の人間としてのものなのか。或いは、憎からず想う相手を害された男としての怒りか。

エスコートというには些か乱暴な扱いで、ウインクラー家当主である父親の執務室に導かれた。狂信的なほどの愛国者で、国とその身に流れるウインクラーの血を何より誇りに思う父が、この時間に邸にいるのは極めて珍しい。

（それだけ、事が重大。お怒りというわけね）

分かつていたことではあるが、父との対面を前に身体が震えそうになる。逃げ出したくてたまらない。

けれど、そんな情けない姿を、自身の腕を掴んだままの兄に悟られるのは嫌だった。

「お兄様、一人でまいます。手をお離してください」

腕が無言で離される。解放されたそこを軽く撫で、姿勢を整えてから目の前の扉を叩いた。

「……入れ」

入室を許す声に室内に踏み入ると、正面の机の向こうに兄そっくりな瞳でこちらを見据える父、ハンネス・ウインクラーが座っている。「国の護り」と呼ばれるウインクラー家当主との対峙。震える両手を強く握り締め、私は机の前まで歩み寄った。

「……思ったより早かったな。殿下の命はしかと受け取ったか」

「はい。殿下との婚約が既に破棄された旨、お伺いしてまいりました」

そう答えると、こちらを探索するアイスブルーの瞳を向けられる。そこに親子の情愛のよくなものは感じられない。

物心つく前に母を失ってから、私の家族は父と兄だけだが、今なら家族というには冷めきった関係性なのだと分かる。父の注意がこちらを向くのは何かしらの命令がある時だけ。兄と笑い合って遊んだ記憶もない。前世の記憶を思い出すまでは、それが私の知る「家族」だった。

「ヘリングの娘を抑えられてしまったのは失態だったな」

唐突に父が口にした名前に、身体が震える。

「あの娘の行為自体は大したものではないが、ヘリングはうちの係累、娘のほうもお前との繋がりが強すぎた。そこを制御できなかったと言われてしまえば、こちらとしては最早、何も言えん」

父の言うヘリングの娘、ヘリング伯爵令嬢のカトリナは、ゲームにおいては悪役令嬢の「取り巻き」の一人という設定だ。悪役令嬢の意を汲んで、ソフィアに対して数々の嫌がらせを仕掛けるのだが、実際、私が彼女に何かを指示したことはない。そんな必要

はなかつたから。

公爵令嬢であり、王太子の婚約者でもあった私の望みは、私が望む前に周囲によって叶えられてきた。ソフィアに関しても同じこと。「私が不快に思っている」と見なされた時点で、彼女は排除対象となった。

（私は何も指示していない。……だけど、止めることもしなかった）

それが間違いだとは思わない。おそらく、父も同じ決断をした。公爵家としては、政治の駒にもならない王太子の想い人など厄介事ではない。だから、父は学園内での私の行いを静観していた。

学園で起きていたことを父が知らなかったはずはない。閉ざされた空間とはいえ、父にはそれだけの力があり、王太子は国の礎、父が護るべき対象だ。

（むしろ、好きにさせることで、私を試していたのかも）

私の王太子妃としての資質を測っていたのだろう。そして、私は失敗した。その失敗をどうやったら巻き返せるか。

娘であろうと、国のためならば平気で道具として扱う父に、親としての情を期待するのは無駄なだけ。挽回する方法を思案するうちに、父の口から自問のような呟きがこぼれた。

「ただ、陛下の御心も解せん。婚約の破棄に関しては受け入れるが、殿下が望まれたとはいえ、何の後ろ盾もない男爵家の娘を王太子妃に据えようなどと」

不快を示す父の表情に閃きを得て、私は覚悟を決める。

（親の情が期待できないのなら、認めさせるしかない。私の価値を、自分の力で……）
そのための一手として、どうやら、父をもつても未だ手にしていないらしい情報を口にする。

「ソフィア様は、花の王家ハブリスタントの末裔でいらっしゃいます」

「っ!? 馬鹿な、そんな情報はどこからも入っていない。不用意な発言はよせ。不敬に当たる」

「事実です」

前世のゲームという不確かな知識からの情報だが、私に切れるカードの数は限られている。断言して、言葉を続けた。

「まだ力に目覚められたばかりなのでしょう。ですが、殿下と、……私との婚約破棄をお認めになったというのであれば、陛下も既にご存じなのではないでしょうか」

「……お前の言葉が真実であれば、確かに納得はいく。ハブリスタントの再興は我が国の悲願。現王家としても、これ以上ない良縁はあるな」

半信半疑、といったところだろうか。私の言葉を信じてはいないが、それを真とすれば成り立つ仮説に、父が困惑している。

「クリステイナ、その情報はどこで得た？ 殿下に明かされたか？」

「いいえ。殿下からは何も伺っておりません。お兄様も、おそらくご存じではないでしょう」

「では、いったいどこで？」

重ねて聞いてくる父に、首を横に振って答えた。

「それは明かせません。ただ、私にも、お父様の知り得ぬ情報を得る手段がござい
ます」

「……この話の信憑性は？」

「私自身は間違いなく真実だと思っております。ですが、まあ、証は何かありませんから、そのような可能性もあるとお心の隅にでもお留め置きください。お父様なら、いづれご自身で同じ真実に辿り着かれるでしょう」

値踏みする視線を向けられて、無表情で返す。暫しの沈黙の後、父が口を開いた。

「思ったほどお前が取り乱していないのは、ソフィアという娘の血筋を知ったがためか？ 己の行いを省みて、悔いているとでも？」

「いいえ、まさか」

その言葉を即座に否定する。

「ソフィア様の出自を把握したのはつい最近、それこそ、殿下が私との婚約破棄に動かれた後です」

「ふん。では、何故そこまで落ち着いている？ お前は殿下に婚約を破棄され、家の名に泥を塗った。おまけに、その娘が本当に前王家の血を引くというなら、国に弓を引いたことになる」

「私は今までの自分の行いが間違っていたとは思いません。全ては国のため、将来の王太子妃としての行動でした」

過去の自分は真実そう思って行動していた。結果が失敗に終わったのは、ソフィアがハブリスタントの血を引いていたという予測不可能な事態が起き、結末が覆されたからにすぎない。

淡々と答えると、父が小さく息をつく。

「まあ、いいだろう。今回の件に関しては、私も事態を読み誤った。お前一人の責というわけではない。だが、これ以上、王家の不興を買うわけにはいかん」

「では？」

「学園を辞めろ。退学して嫁よめげ。嫁よめぎ先は見つけておく」

その答えに、やはりと思う。ある程度、覚悟していたこと。父ならば、そう判断してもおかしくない。王家の不興を買った娘など、最早、公爵家に益のある家に縁づける程度にしか使い道がなく、自身のこれからの行く末がバラ色に輝いているとは到底思えなかった。

それでも、あがいてみせる。

「お待ちください、お父様。私は、学園を辞めません」

このまま何もせずに終わらせるつもりはない。

父への抗命に、目の前のアイスブルーの眼差しが鋭くなる。

「私の決定に逆らうつもりか？」

父に対する、初めての抵抗かもしれない。今や、父の瞳に見えるのは冷たい怒りだ。

父にとってはただの道具、思い通りに配置できるはずの駒が、駒であることを放棄した。その怒りは如何いかほどのものか。その冷たさに、心臓の音が速くなる。

「私の命に従わぬなら、今すぐ出ていけ。金輪際ことごと、ウィンクラーの名を名乗るな。その覚悟もなしに逆らったというのなら、お前は愚かだ。思考などせず、私の命にだけ従ってればいい」

「お父様、私は『お待ちください』と申し上げました」

私の言葉に父の瞳は胡乱うろんなまま。先を促うながされて、答えを口にする。

「お父様の命に従えないのは半分だけ、学園を辞めるという点に關してだけです。私とてウィンクラーの娘。殿下との婚約が破棄された今、いずれは家のための婚姻を結ぶことに否やはありません」

実際、今まで結ばれていた王太子との婚約もそうだった。王太子の後ろ盾を欲した王家と、国の護りを第一義に王家との繋がりを欲したウィンクラーとの間で成された契約。そこに、当人である私たちの意思は存在しない。

それでも、共に過ごす時間のうちで確かな敬意と親愛が育っていたはずだったが――
(多分、私と殿下では、根源的に求めるものが違った……)

同じく政略で結ばれた国王夫妻は、そうとは思えぬほどに仲睦まじく、アレクシス殿下はそんな両親の姿を見て育っている。

一方、前世の記憶を取り戻すまで、私には「夫婦」というものの在り様ありようがよく分かっていなかった。王太子妃という「役目」なら分かる。何をするべきなのかも。けれど、殿下の「妻」としての自身を思い描くことはできなかった。だから、当然のように、ソフィアを排除するべきものだと見なしたのだ。彼女はこの国の治世に必要ない。

（今なら、単に、愛する人と結ばれただけという気持ちも理解できるけれど）
それは、今の私にとっては望めない未来。ただ、望めなくとも、諦められないこともある。

「お父様、私、学園を首席で卒業いたします」
「何だと？」

父の不審の声に、私は胸を張った。

「だって、馬鹿らしいではありませんか。殿下に婚約を破棄された私は傷物、言ってしまうば、今が底値です。貴族令嬢として最低の価値しかない。その状態で市場に売り出すなど、あり得ません」

口にするのは自身の価値。父には、情ではなく計算で決定を覆してもらうしかない。
「私自身の意地としてもそうですが、ウィンクラーとしても許せるものではありません。こちらの足元を見て集る輩^{たかやから}に嫁ぐなど。嫁ぐなら己の価値を高めてから、ウィンクラーとしての誇りを取り戻してからと考えています」

「……それが学園の首席卒業だということのか？」

「はい。最も分かりやすい指標の一つですから」

こちらの提案に考え込む様子を見せた父の判断を待つ。



（絵空事、と言うほど遠くはないはずよ）

幸いなことに、学園卒業時の首席は三年時の成績だけで決まる。卒業までの一年間に行われる二度の試験に加えて、卒業演習である御前試合で好成績を残せば、首席を取れる可能性は十分にあった。

暫くの沈黙の後、父が口を開く。

「分かった、やってみる」

「っ！ ありがとうございます」

サラリと告げられた言葉に身体中の血が沸騰した。

大きな賭けに勝った。緊張から解き放たれた身体が息を吹き返す。同時に、自身が口にした「首席卒業」という高い壁に挑むことへの高揚、自身の努力次第で未来が変わる可能性に、心臓が痛いくらいの鼓動を刻み始める。

「ただし、条件をいくつかつける」

「条件、ですか？」

ドクドクと耳元でうるさい自身の脈を感じながら、父の言葉を聞き返した。

「期末の考査に関しては、必ず首位を取れ。前期で首位を取れなければ、その時点で退学させる」

「分かりました」

「これ以上、お前に無駄な金をかけるつもりはない。侍女は引き上げさせる。家庭教師もなしだ。やるというなら、己一人の力で成し遂げてみせろ」

「はい」

元よりそのつもりではあった。日常生活の補助をしてくれる侍女を取り上げられるのは痛い、前世を思い出した今なら、やってやれないことはない。

了承の返事に、父が頷き返す。

「ウィンクラーは、殿下の不興を買ったお前を切り捨てる。最後の情として学園は卒業させてやるが、貴族令嬢としての扱いはしない。……そういうことだ」

「承知、しました」

「身を慎め。これ以上、殿下の不興を買うような真似はするな」

頷いて、最後にもう一度、礼を口にした。

辛うじて閉ざされることのなかった未来、それを切り開いていくのはここから。これから先の道を、自分一人の力で進まなければならない。

父の書斎を出た頃には日が暮れかけていた。そのまま公爵邸に泊まるのが許された

のは、それも「最後の情」ということなのだろう。

入れ替わるようにして父の書斎に呼ばれた兄とは夕食の席で顔を合わせることもなく、その後は就寝のため自室へ引っ込んだので言葉を交わすことはなかった。

私の処遇について父から聞かされるのだろうが、彼がどう反応するか。それが気にならないと言ったら嘘になる。

(……大丈夫、絶対、大丈夫)

寝支度を済ませて倒れ込んだ寝台。今日一日の疲労がどつと押し寄せてきた。

目をつぶると、脳裏を巡る場面、複数から向けられる敵意、怒り、こちらを害そうとする明確な意思。向けられた鉄の刃の鈍い輝きを思い出して、今さらながら自分の身体を抱き締める。

(ソフィアは、こんなものをずっと向けられてたのか)

それは確かにキツかっただろう。だけど、同情はしないし、罪悪感も抱きたくはない。殿下の傍にいたことを選んだのは彼女自身。辛いなら、嫌なら、殿下から離れば良かっただけのこと。

そう思うのは公爵令嬢としての私の意識。その一方で、僅かな罪悪感と共に、それほどまでに殿下を想えるソフィアを凄いと感じた。

(この感情は、きっと前世の私の意識のせいね)

婚約破棄を告げられたショックで思い出したのは、乙女ゲーム『蒼穹の輪舞』を中心とするものばかりで、はっきり「私」というものを思い出したわけではない。日本という国やゲームといった存在、転生という概念や、『蒼穹の輪舞』をプレイしたという記憶はあるものの、肝心の自分自身に関する記憶が見当たらなかった。

(乙女ゲームをプレイしていた時点で、多分、女だった、ということとは分かるのに)

では、歳は？ 仕事は？ 家族は？ そんな記憶は、まったく蘇らない。

(でも、今はそんなことは重要じゃないから、いい)

今、情報として必要なのは『蒼穹の輪舞』に関することだけ。ただそれも、婚約破棄が成された後では無用の長物かもしれなかった。

(ゲーム通りなら卒業式典で婚約破棄、式典後のパーティでソフィアの正体が明かされ、殿下との婚約が発表されて、ゲーム終了。最後に、二人の結婚式のシーンがあった気がするけれど……)

実際の婚約破棄は式の一週間前だった。

時期がズレた理由として、ここがゲームとは違う世界だという可能性や、ヒロインであるソフィアもまた転生者なのではないかという推測が浮かぶ。

「……まあ、だとしても、もう関係ない、か」

暗い部屋に、自身の眩きがこぼれる。

本来なら、王太子の婚約者として式典に参加し、式典後のパーティに彼と出席するのは私のはずだった。既にドレスは仕立て済みだが、この先、殿下の色味に合わせて作られたそれが日の目を見ることはない。

不意に、涙が込み上げてくる。

涙の理由は自分でも分からない。王太子妃になれなかった悔しさだろうか。殿下を愛していたわけではないけれど、王太子妃になるために積み上げた努力は嘘ではない。それらが無駄になったことは心の底から悔しい。

(……馬鹿みたい)

愛していたわけでもない人を失って泣いている自分がおかしかった。

私はただ、王太子妃、将来の王妃としてこの国のトップに立ちただけ。ただ、その夢が潰えただけなのに――

(大体、私、王太子妃になって、その後は何をしたかったんだろう)

前世の記憶が蘇るまでの私、クリスティーナ・ウインクラーには、そこから先の「何か」がなかった。ただ、この国の女性のトップに立つ。それが、最終目標になってし

まっていた。

(昔、子どもの頃はとうだったっけ?)

殿下の婚約者選ばれた時、「将来、殿下の隣に立つのはお前だ」と言われた私は、殿下の隣で何をするつもりだった――?

「忘れちゃった……」

横になったまま、閉じた瞼に拳を押し付ける。忘れてしまった過去に別れを告げた。もう忘れた。もう思い出さない。今考えないといけないのは、これからのことだから)

父に誓った新たな目標は実現可能ではあるが、決して容易いものではない。幸いにも、自分は殿下の婚約者を降ろされた身、今まで王太子妃教育に当てていた時間を自由に使える。

皮肉な思いに、口元が歪んだ。こんな歪な笑みを浮かべる女は、到底、王太子妃に相応しくない。けれど、それが今の私、クリスティーナ・ウインクラーなのだ。



公爵邸から学園の寮に戻ったその日から、私の生活は一変した。

「あら？ どなたかと思えば、クリスティーナ様？ ごめんなさい。あまりにみすばらかったので気付きませんでした」

寮内の食堂、登校前の朝食の時間に一人食事を終えたところで、悪意ある言葉を投げつけられる。顔を上げた先には、昂然と胸を張るリッケルト侯爵令嬢テレゼとその友人たちが立っていた。

「嫌だ。公爵令嬢ともなると、殿下に婚約を破棄されても平気な顔をしていられるのね。私なら、恥ずかしくてこの場になんていられないわ」

「あら、でも、確かクリスティーナ様はウインクラー家を放逐されたのじゃなかったかしら？ 公爵令嬢とお呼びするのも障りがあるわね」

私が寮に戻った日から始まったテレゼたちの嫌がらせは、ただ、毎回、同じような言葉をネチネチと繰り返すだけのもの。三日も続けば、いい加減、付き合うのも馬鹿らしくなる。自身の味方がまったくいない状況では、黙ってやり過ごすのが最も面倒が少

ない。

（まあおかげで、学園の噂については大体、把握できたわね）

彼女たちによると、私が殿下に婚約を破棄されたこと、その理由が殿下の不興を買ったからであること、そして、私が公爵家からも見放されていること、この三点に関しては、確定事項として噂になっているらしい。

「ユリウス様もお可哀想に。こんな女が血を分けた妹だなんて」

「本当に。ユリウス様は妹の不始末を殿下に謝罪なさったそうよ」

「まあ！ 家にごここまで迷惑をかけて平然としていられるなんて、本当に、なんて浅ましい」

私と殿下の婚約破棄について、正式な発表は未だされていない。それにもかかわらず、これほど早く「確度の高い情報」として噂が出回ったのは、殿下側がそう動いたからだろう。

わざわざ、破棄の原因が「殿下の不興」と付加されているのは、ソフィアを守るため。彼がソフィアを寵愛していることも私がソフィアを排斥しようとしていたことも周知の事実なので、誰もが、それが婚約破棄の原因だと考える。ソフィアの血筋が明かされぬ中にあるって、その噂は彼女の盾となるだろう。

現に、今の学園でソフィアに手を出そうとするものはいない。自身の派閥にあった者たちだけでなくテレーゼたちも、ソフィアに関しては表立った行動を起こせずにいた。「私、以前より、クリスティーナ様がアレクシス殿下に相応しいとは思えませんでした」

「ええ。私も。殿下に相応しい方は、家柄、血筋は当然のこと、誰よりも美しく、教養に優れた方、やはり、テレーゼ様のような方でなくては」

「まあ！ 貴女たちったら」

分かりやすい世辞にテレーゼが笑みを浮かべる。

彼女たちがこうして私にちよっかいをかけるのは、手の出せないソフィアの代わりに私を利用し、殿下の傍にいるソフィアを牽制する（けんせい）という目的もあるのだろう。

（それはそれで、下策だと思うけれど）

言わせてもらえば、彼女たちは私にかかずらっている場合ではない。彼女たちが今とるべき行動は、ソフィアにおもねることだ。

それをしてない、できないのは彼女たちのプライドの高さ故か、もしくは本気で王太子妃の座を諦めていないからなのか。かつては、殿下の婚約者としてテレーゼからのやっかみを受け続けた身だ。彼女の殿下への執着は私が誰よりも知っている。

（それも、もう私には関係ない話だけ……）

目の前で続く益体（やくてい）もない会話に見切りをつけて立ち上がるところで、背後から冷たい衝撃に襲われた。

（っ!? いったい、何が……?）

「あら、まあ、大変！ クリスティーナ様ったら、水浸しね」

「そのようなお姿もお似合いではありませんが、この場には相応しくありませんね。さっさと退出なさったらいかが?」

頭の上を感じる濡れた気配。額（ひたい）や首筋を流れ落ちていったものが服を濡らす。咄嗟（とつさ）に動けずいると、髪から垂れた水滴がテーブルの上にシミを作っていく。

背後から悲鳴のような声が上がった。

「も、申し訳ありません、クリスティーナ様、私、私！」

振り返った先、見慣れた顔があったことに驚く。カトリナ・ヘリング——顔を蒼白（そうはく）にし、手にした空のグラスを取り落としたのは、かつて自身の「友」であったはずの少女だった。

彼女の視線が、私とテレーゼたちの間で行き来する。その怯えた眼差しに事態を呑み込み、私は無言で立ち上がった。

「ク、クリスティーナ様……」

「あら？ 野良犬は野良犬らしく、場を弁えることにしたのかしら？」

カトリナの小さな声とテレーゼの押揃を背に、手にしたトレーを持って歩き出す。頬に張り付く髪と濡れた服が不快だ。いくつもの嘲りと侮蔑の視線の間を縫って進む。その時、視界の先、目に映った人物の姿にふと好奇心が浮かんた。

今の私の状況に、彼女はどう反応するのだろうか——？

通りすぎる途中で、歩みを止めてみる。

「え、クリスティーナさんっ!？」

見下ろす先には、驚きに見開かれた蒼穹の瞳があった。けれど、視線が合ったのは一瞬のこと。すぐに視線を逸らし俯いた彼女を観察する。

その横顔に浮かんでいるのは後ろめたさだろうか。何も言わない彼女の姿を認めて、私は再び歩き出す。

(……良かった)

私の窮状にソフィアは動かなかった。見ない振りをした。

そのことに、言い表せないほどの安堵を感じて、知らず口角が上がった。

食堂を出た後、濡れ鼠の状態で、私は自室への廊下を急いだ。

始業まで時間がない。辿り着いた部屋で、脱ぎ着の厄介な服から何とか一人で抜け出し、新しい服に袖を通す。とは言っても、手持ちの服は公爵令嬢に相応しいようにと仕立てられたものばかり。どれだけシンプルなものを選ぼうと、自力で着脱できるように作られていない。

「ああ、もう！」

迫る始業時間に気持ちが焦る。背中の留め具をいくつか先に留めてから必死で身体を押し込んだ。残りの留め具に精一杯手を伸ばしても、なかなか上手いかない。

視線を横に向ける。そこにある鏡を見ながら留め具を嵌めようとして、目にしたものに手が止まった。

(……なんて、見苦しい)

鏡に映るのは、生気のない顔をした女。化粧の取れかけた顔に濡れて崩れた髪を張り付かせ、不恰好に服を纏っている。

惨めで情けない姿、そう判ずるのは公爵令嬢である私。

その惨めさに目の奥が熱くなるのは、前世の私に引つ張られているせいで、クリスティーナ・ウインクラーが、この程度のことで涙するなどあり得ない。

（大丈夫よ。授業にはまだ間に合う。落ち着いて）

そう自身に言い聞かせて、先に髪を纏める。数日前までは常に侍女の手によって複雑に結び上げられていた髪だが、今は大ぶりのバレッタで留めるだけにしていた。留めた髪の下で背中^にに手を伸ばす。今度は上手く嵌まった留め具にほっとして、正面から鏡に向く。

（酷い顔）

婚約破棄以来、食欲が落ち、眠りも浅い。血色の悪さを隠すための厚い化粧も、水を浴びたせいで殆ど剥^はげ落ちていた。手早く修正を加えながら、自身をこんな目に遭^あわせたカトリナを思う。

（さっきの状況からすると、カトリナはテレゼにいたということね）

私が貴族令嬢としての価値を失った今、彼女が新たな拠^よりどころを得ようと動くのは正しい判断だ。ウインクラーと敵対するリッケルトにいたことは予想外だったが、そこはおそらく、ヘリング伯の判断によるもの。家として、ウインクラーを捨ててリッケルトにつくことを選んだのだろう。

（或いは、切り捨てたのは父のほうなのかも）

カトリナは殿下の側近候補であるイエルク・ミューレンと政略上の婚約を結んでいた。

その婚約も、私の婚約破棄と同時に解消されている。彼女がソフィアに行った嫌がらせの数々をイエルク自身の手で暴かれてしまったので、避けようがなかった。ただ、彼女が学園を去らずに済み、婚約が破棄でなく「解消」となった裏には、イエルク側と取引があったのではと考えている。

（たとえば、『嫌がらせは、私の指示で行った』と証言するとか……？）

殿下の思考とイエルクの手腕があれば、その程度の偽証はあり得る。実際、カトリナに証言されれば、偽証だと証明するのは難しく、状況的にあり得ると判断される可能性が高い。

ただ、それは明らかなウインクラーへの裏切り。父が知ったら、決してヘリングを許さないだろう。

鏡に映る自分をもう一度眺める。全体的に貧相であることは否めないが、厚く化粧を重ねたことで顔色を誤^ご魔^ま化^かすことはできた。

（これからは、なるべく化粧品も節約しないと）

家からの援助が絶えた今、私には自由になるお金がない。今までのように化粧品に湯水のようにお金をかけることはできなくなった。顔色が戻れば、化粧の仕方を変える必要がある。

前世の感覚なら、十七という歳でそこまで化粧に拘る必要もないと思えるが、見栄と体裁を気にする世界では侮られる要因となることもまた事実。

（それこそ、主人公くらいの美しさがなければね）

化粧の類いを一切せずに、それでも愛らしい美しさを保つ少女を思いながら立ち上がる。時計を確認してから部屋を出た。

既に人気のない廊下を見て、少々気持ちが悪く。

（本当に時間の無駄ね……）

今の自分が置かれた状況、周囲の煩わしさに気分が落ち込む。けれどそれも、食堂で見たソフィアの姿を思い起こすと、僅かに前向きになった。

今や強者の立場であるソフィア。彼女の言葉は誰も無視できないことを彼女も周囲も理解している。あの場で彼女が少しでも私を庇えば、場の空気は変わっていただろう。けれど、ソフィアは何も言わなかった。

□元に満足の笑みが浮かぶ。

（本当に良かった。もし、あそこで彼女に助けられでもしていたら……）

私は負けを認めずにはいられなかった――

もしも彼女が、自身を害した相手さえ庇うような「正しい選択」をする相手だったら、

私は諦めるしかない。彼女は一生越えられない壁、遥か高みの存在だと認め、自分の犯した罪を一生悔いて生きるだけだっただろう。

けれど、彼女は自分と同じ「人間」だった。見たくないものには目を閉じ、敵対する相手は切り捨てる。そういう普通の感情を持った、普通の選択をするただの人――

（だったら、まだ戦える……）

まだ手が届く、同じ土俵に立てる。彼女は、決して、「正しい選択」をするだけの天上人ではない。

私の所属する淑女科の授業は座学が中心で、演習は殆ど行われない。魔術などの科目も一応は存在するが、実技があるのは裁縫などの家政くらいのもの。つまり、授業が始まれば、直接的な嫌がらせを受ける心配はなかった。

一時間目の始業にも何とか間に合い――入室の際に、同級であるテレゼたちからの嘲笑は受けたものの、私は午前の授業を無事に終える。

授業が終わると同時に淑女科の教室を出た。テレゼたちの干渉が煩わしかったものがあるが、一つの目的があつて食堂に向かう。

ゆつたりと過ごしていた。だが、それは殿下の婚約者だからこそ許されていた特権。公爵家の財力を用いた贅沢な時間は、最早過去のものでしかない。

（今では食費にも事欠く有様だもの。食堂が無料で助かった）

でなければ、昼食抜きの毎日に、いずれは身体を壊していただろう。食堂に着き、周囲を見回す。

（……今日もいないみたい）

ここ数日、毎日食堂に通い続けているのは、会いたい人物がいるからだ。

正確に言えば、彼女とは寮で毎日顔を合わせており、現に今朝も顔を合わせたばかりだった。それでも、彼女とはこの場で会うことに意味がある。

目的の人物が見つからない代わりに、周囲からはいくつもの好奇の視線を向けられていた。嘲笑も投げつけられる侮蔑の言葉も、気付かぬ振りで前を向く。

食堂を出ていこうとしていた男子生徒を避けようとして、すれ違いざまに肩をぶつけられる。

「おっと、申し訳ない、クリスティーナ嬢。まさか、貴女がこんなところにいらつしやるとは思わなかったもので」

おそらく騎士科の生徒だろう。貴族階級ではない男の揶揄に、男と一緒にいた友人た

ちが笑い声を上げた。それを黙ってやり過ごす。こちらが何の反応もしないので、男たちは肩をすくめて去っていった。

部屋の隅に身を寄せ、ジリジリと焦る気持ちを押し込めて待ち人が現れるのをひたすら待つ。

（もし、明日までに現れなかったら……）

その時は次善策、女子寮での決行を余儀なくされる。だが、できればこの場、衆人環視の中で行いたい。彼女の隣に彼らがいる時に――

突如、食堂の空気が騒めいた。こちらに向けられていた突き刺さるような視線が離れていく。彼らの視線が向かうのは、いくつも並んだテーブルを挟んだ反対側、魔術科棟に続く出入り口だ。

（来た……！）

視界にストロベリーブロンドの髪が映る。アレクシス殿下と並んだソフィアが食堂に入ってきた。彼らの背後に付き従うのはイェルクとギレス。加えて、今はそこに兄ユリウスの姿もある。

（ウインクラーと王家の蜜月を示すため、か）

殿下と私の婚約が破棄されようとも、ウインクラーは王家と共にある。内外にそう示